

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

—Carl von Clausewitz and the Concept of Politische Verkehr—

山崎カヲル

はじめに

『戦争論』(Vom Kriege)は周知のように、プロイセンの軍人であり思想家でもあったカール・フォン・クラウゼヴィッツ(Carl von Clausewitz, 1780-1831)の主著である。全8篇で構成されている。彼の死のあと、残された草稿群をマリー夫人が友人たちの協力をえて編纂し、1832年から34年にかけて『クラウゼヴィッツ将軍遺稿集』全10巻のはじめの3巻として公刊された(以下ではこれを初版と呼ぶ)。この『戦争論』の成立過程に関するいくつかの主題について、彼の「政治的交通」(der politische Verkehr)という概念を前景化することで、『戦争論』をめぐる複雑な問題の解決にながしかの糸口を計り、日本でのクラウゼヴィッツ研究の一助とすることが本稿の主題である。これまでの国際的なクラウゼヴィッツ研究史においても、私が探査しえたかぎりでは、この概念に着目した論考は存在していない¹⁾。

わが国では『戦争論』はすでに幕末にオランダ語訳のかたちで渡来しており、勝海舟から同書を譲られた佐久間象山が、その戦略と戦術の区別に注目していた。のちに森林太郎(鷗外)は、ドイツ留学中に『戦争論』を私的に講義する機会に恵まれ、やがて1901(明治34)年には、その第1篇と第2篇とを訳出して印刷させている。したがって、1世紀以上にわたる紹介の歴史を持っているのである。しかしながら、すでにいま流通している翻訳書が4種類(抄訳を含む)あるにもかかわらず²⁾、今日にいたるまで、研究と呼べるような水準の研究は日本では皆無なのであり、この分野での知的貧困は眼を覆うものがある³⁾。本稿がそのような状況を打破して、ながしかの寄与をなすであろうことを願って、論を進めたい。本稿で論じられるのは『戦争論』のほんの一部だが、こうした密度を持った研究がもっと必要なのである。

かつてフリードリヒ・ニーチェは、『道徳の系譜学』の「序言」において、せわしない「近代人」の読みに反対して、それにかわって「牛」になって「反芻すること」(das Wiederkäue)を要求していた。以下で展開されるのは、一頭の和牛の「反芻」の試みである。

戦争とコミュニケーション

しかし、なによりもまず『コミュニケーション科学』というタイトルを持った専門雑誌に、なぜ『戦争論』をテーマとする論文なのかという疑問がはじめに生じるのは当然であろう。コミュニケーション研究に、クラウゼヴィッツがなんのかわりがあるのか。最初にこの疑問にある程度答えておくことから、論を進めたい。

『戦争論』は古今東西の軍事理論書のなかでも『孫子』と並んで、古典中の古典とされている。今日でも世界的に多くの読者がおり、近年ではそれに関する優れた研究も各国でこれまで積み上がっているのは確かである⁴⁾。それゆえに、十分に研究対象に値している。かつてフリードリヒ・ヴィルヘルム・リュストウ⁵⁾は『19世紀の将帥術』（初版・1857年）において、「クラウゼヴィッツは多く名前を挙げられるが、わずかにしか読まれていない (wird viel genannt, ist aber wenig gelesen)」(Rüstow 1867: 536) と述べていた。実際、1972年にいたっても、レイモン・アロンは「きわめてしばしば言及されるが、きわめてわずかにしか読まれていない」(Aron 1987b: 53) と嘆いているほどなのである。しかし、1976年にピーター・パレットとアロンがまさしく path-breaking といってよい研究書を発表して以来、優れた著作や論文が陸続として刊行されている。特に、20世紀末から今世紀初頭にかけて、英語圏を中心に若い研究者たちが抬頭し、彼らは例外なくドイツ語に堪能で、従来までのクラウゼヴィッツ解釈に囚われることなく、活発な議論を展開している。私のこの仕事も、彼らから裨益されたところが少なくない。

日本では、明治期の森林太郎（鷗外）の部分訳からはじまって、現在までに6種類もの翻訳（抄訳を含む）が存在する。それほど需要が多い著作なのである。しかしながら、クラウゼヴィッツの名前は、いまだにごく狭い範囲の人々にしか知られておらず、彼の思想史的な研究はいかなる意味でもなされてはいない。私は現在、まずは『戦争論』を厳密に「読む」こと、さらに、それを系譜学的な展望のもとで考えることという課題を抱えているが、本稿はそのうちの最初の課題に、主に対応している。第2の課題については、近々クラウゼヴィッツの軍事的天才論というテーマで、本格的に扱う予定である。

だからといって、『戦争論』とコミュニケーション研究を目指す専門誌とのあいだには、一見すると越えがたいギャップが存在しているかのように見える。あまりにも両者のあいだが隔絶しているので、『コミュニケーション科学』誌の読者のほとんどは、一見して強い違和感を覚えるのではないかとさえ思えるほどである。

とはいえ、少し詳しく検討してみるなら、両者のあいだは決して千尋の谷で隔てられているわけではなく、むしろかなり太い線で繋がっていることが判明するのである。それを確認することを、まずは出発点としよう。

広く人口に膾炙しているクラウゼヴィッツのもっとも有名な命題が、同書の第1篇第1章第24節の表題にある「戦争とは別個の手段をもってする政治の継続である (der Krieg ist eine bloße Fortsetzung der Politik mit anderen Mitteln)」(VK 210/I-1-24) であることはいうまでもあるまい。『戦争論』での彼の基本主張を乱暴に要約するなら、まさにこの命題に帰着する。この命題は、その解釈をめぐるこれまで実にさまざまな議論があったし、現在でもその議論は継続されているが、それが彼の理論のなかで中枢的な位置を占めることについては、これまでのクラウゼヴィッツ研究に携わったどのような論者も完全に一致している。もちろん、ここでいわれている「戦争」「政治」「継続」「手段」といった諸概念について、さらなる探求がなければ、それはただの断定にすぎないのだが。

実際のところ、彼はこの表現を別の箇所では、さまざまに言い換えているのであって、そのことから判明するのは、この命題そのものが彼のなかでは決して安定したものではなく、それを支えている個々の構成要素は、かなりの幅を持って振幅していたことである。そうしたヴァリエーションのいくつかを以下で挙げておきたい。

『戦争論』の最良の研究者であったヴェルナー・ハールヴェークが所有していた「ドイツの戦闘力」(Deutsche Streitkräfte) と題された草稿(執筆年代不詳)では、「戦争は別個の手段をもってする政治の発露 (eine Äußerung der Politik mit andern Mitteln) 以外のなものでもない」(VK: 1235) といわれていた。また、1827年7月10日の「覚書」では「戦争とは、別個の手段をもってする継続された国家政治 (die fortgesetzte Staatspolitik mit anderen Mitteln) 以外のなものでもない」(VK: 179) とされる。さらに、1827年末に書かれたフォン・レーダー少佐への手紙では、「異なった手段をもってする政治の継続」(die Fortsetzung der Politik mit veränderten Mitteln) とか「異なった手段をもってする政治的努力の継続」(die Fortsetzung der politischen Bestrebungen mit veränderten Mitteln) ともいわれている (Zwei Briefe: 6)。このように彼において政治と戦争を結ぶ用語群は、必ずしも安定したものではないのである。とはいえ、両者が密接に関係していること自体は疑いえない。ハールヴェークによれば、さきに引用した草稿「ドイツの戦闘力」には、つぎの一文がある。

「戦争はひとつの自立した事物 (ein selbständiges Ding) であって、それに固有な諸法則にしたがってのみ判断されるべきだとか、そこでは政治的諸要素はひとつの変則 (eine Anomalie) としてのみ考察されるべきだということは、大きな誤りである。戦争とはむしろ政治以外のなものでもない (der Krieg ist vielmehr nichts als Politik)。」(VK: 87)

上記のレーダーあての手紙にも、こう書かれている。

「私たちとしてはさらに、つぎのように発言すべきではない。つまり、戦争を単なる暴力と撃滅の行為 (ein bloße Akt der Gewalt und der Vernichtung) と見なして、こうした単純な概念から論理的帰結として、一連の結論を引き出してしまうことである。そのような結

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

論は、現実的戦争はひとつの政治的行為 (ein politischer Akt) であり、その法則は完全にそれ自体のうちで支えられているわけではなく (nicht ganz in sich selbst wirkt)、戦争はひとつの真の政治的道具 (ein wahres politisches Instrument) であって、それ自体で働いているのではなく、別の手によって導かれているのである。この手とは、政治のことである。」(Zwei Briefe: 8)

政治と戦争とのこのように緊密きわまる関係を大前提にしたうえで、ここでまずは、クラウゼヴィッツによって「政治」と呼ばれているもの内実 (それはクラウゼヴィッツ研究の核心のひとつをなしている) のごく一部を取り上げて、それがコミュニケーション研究とのあいだに持つ関連を明らかにしていこう。

まずもって着目したいのは、コミュニケーションということばに該当するドイツ語の Kommunikation である。この Kommunikation はドゥーデンの語源辞典 (*Das Herkunftswörterbuch*) によれば、18世紀にラテン語の *communicatio* から入ったとされる。とはいえ、18世紀あるなら、ラテン語から直接にドイツ語に入ったとは考えられないのであって、おそらくはフランス語を介してのことだったと思われる。この Kommunikation が意味していたのは、ドゥーデンによると「通知・告知」(Mitteilung)「話し合い・相談」(Unterredung) であった。20世紀になって、英語の communication からの影響で、「通報・意思疎通」「情報交換」といった意味が付加される。だが、私が知るかぎりでは、18世紀と19世紀初頭のドイツ語文献では、Kommunikation ということばの用例は、ある例外を除くと、きわめて少ないのである⁶⁾。その例外とは軍事用語であって、兵站線や連絡線を意味する Kommunikationslinie がその代表例であろう。そしてそれは、当時のヨーロッパの軍事理論で最先端をいっていたフランスで使われていた用語 *ligne de communication* から、そのまま借用したものであった。細かい考証は本筋から離れてしまい、また、あまりにも煩雑になるので、本稿では省かせていただくが、そのことは1800年前後にドイツで出版されたいくつかの軍事用語辞典から明白である。しかし、軍事用語に限定されない広義のコミュニケーションに該当する、別個の表現が同期のドイツ語には存在していた。それが「交通」(Verkehr) である。

前記のドゥーデン語源辞典によれば、Verkehr は名詞としては18世紀に登場しており、本来は商取引 (Handel) や商品の販売を意味していた。やがてそこから派生して「交際、社会的接触」といった広い内容を持つようになったとのことである。ドイツ語の Verkehr には日本語の交通機関とか交通事故といった用法での交通よりも、はるかに広範な字義が収納されているのである。実際、手元にあるいくつかの独和辞典で調べると、そこには通常の交通以外に、「交際」「交流」「つきあい」「性的なまじわり」「性交」といった訳語が見いだされる。つまり、人間の活動がなんらかのかたちで相互に交差することが、Verkehr の基本的な内容なのである。当時よく使われていたピーラーの辞典⁷⁾ によると、それは Handel

und Wandel, つまり「商業」あるいは「日々の営み」ということになる。ここでひとつだけよく知られた例を挙げるとしたら、マルクスとエンゲルスの草稿『ドイツ・イデオロギー』（1845年から46年にかけて執筆された）ではVerkehrは、男女の性的関係から、のちに社会的生産関係として厳密化されるようになる、生産における人間関係にいたる広範な領域の活動を包含する概念として使われていることに着目しておきたい⁸⁾。それは私たちがコミュニケーションと呼んでいるものと、ほぼ同義といってよい。とはいえ、このように複雑な内容をひとことで表現できる単語が日本語にはないので、本稿ではとりあえずVerkehrには交通という訳語をあてておく。

交通ということばは、ごく普通な意味で当時の軍事書にも登場する。リュール・フォン・リリエンシュテルン⁹⁾は、「戦争と平和とが、諸国家の生存と交通における(im Leben und Verkehr der Staaten)相互に対立した状態であらざるをえないことは、本来的に明らかである」(Rühle von Lilienstern 1814: 2)と述べているし、クラウゼヴィッツ自身も1812年に、「交易とその交通(der Handel und sein Verkehr)とは、対外活動の生き生きとした精神をもって、市民社会のあらゆる部門を貫き流れている」(Schriften 1: 691)と書いているが、これらはVerkehrのごく一般的な用法でしかない。

しかしながら、政治的交通となると、それは特別な内容を持っている。

「政治的交通」とはなにか

政治的交通(der politische Verkehr)¹⁰⁾という用語は、『戦争論』でももちろんなんども使われているのだが、『戦争論』以外で彼が使った用例は、私が調べたところではあるが、わずかに2度しかない。『遺稿集』¹¹⁾第8巻で公表された『1815年の対仏戦役』と、同第10巻に収録された「カール・フォン・ブラウンシュヴァイク大公の1787年対オランダ戦役」(HW 10: 255-320)である。

前者においては、こういわれている。

「戦争とは決してひとつの自立した事物(ein selbständiges Ding)としてではなく、政治的交通の修正(eine Modifikation des politischen Verkehrs)として、鬭争という領域を通じての政治的な計画や利害の遂行として考えなければならない。」(HW 8: 187)¹²⁾

また、後者には、つぎのような言明がある

「一般に戦争とは、人民や国家のあいだでの政治的交通が織りなす糸の継続(die Fortsetzung der Fäden des politischen Verkehrs zwischen den Völkern und Staaten)にすぎないのであって、いかなる戦争も、政治的相互関係(die politische Verhältnisse)を考慮することなしには、まったく理解不可能である。また、ここでのように政治的相互関係が純粹の敵対から遠く隔たっており、戦争そのものが講和との絆を織り込んでいるような場合には、も

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

っとそうである。」(HW 10; : 267)

クラウゼヴィッツが書いた戦争論関係の文章は、『遺稿集』や『戦争論』以外にもかなりあるが、そのうちの代表的なものをチェックしても、政治的交通は出てこない。「1804年の戦略」(VKS: 1-61)や、1805年のビューロウ批判(VKS: 63-88)といった初期の論考はもとより、「王太子進講録」(VK: 1047-86)¹³、ある程度まで彼の戦争術の概要を伝えてくれている1812年の「信条告白・第3部」(Schriften 1: 708-50)、さらにはハールヴェークが公刊した『戦争論』草稿(Schriften 2)にも、政治的交通は姿を見せていない。もっと重要だと思えるのは、後期のクラウゼヴィッツの思想を要約しているとされる、1827年7月10日の日づけを持つ「27年覚書」(VK: 179-81)や、同年末に書かれたフォン・レーダー少佐あての手紙(Zwei Briefe)にもまったく出現していないのである。したがって、その登場は1827年以降だと推測するのが適切であろう。もっとも、そのように主張するためには、あらかじめいくつかの障害を乗り越えなければならない。

その障害の第一は、「ブラウンシュヴァイク大公の対オランダ戦役」の執筆時期に関する。ピーター・パレットはルードルフ・フォン・ケンメラ¹⁴が著書『クラウゼヴィッツ』(1905年)において、クラウゼヴィッツの初期の労作であるかもしれないと指摘していることを conceivable だといいながら、より遅くの成立も可能だとも述べている(Paret 1985: 343n)。もっとも、パレットはなにが誤解しているようで、ケンメラはこの草稿について述べている当該箇所では、実際には成立時期については「察知できない」(läßt sich nicht ersehen)と語っているにすぎないのである(Caemmler 1905: 77)。パレットはそれ以上のことに触れていないが、私見としては少なくとも上記の箇所については、1828年以降の執筆あるいは加筆があったと推量したい。最新の優れたクラウゼヴィッツ伝を書いたストーリーカーは、「議論の余地がある」としながらも、1827-30年のあいだだと推定している(Stoker 2014: 262)。

『対仏戦役』のほうは、ケンメラは1825年以降の執筆だとし(Caemmler 1905: 77)、ピーター・パレットは1827年から1830年にかけてのものだと見ている(Paret 1985: 330)。パレットの比定については異論がこれまで提出されていないので、それをそのまま受け入れておきたい。つまり、「27年覚書」のあとで書かれたものなのである。

要するに『戦争論』を除いた文書で「政治的交通」が語られているのは、1827年のあとということになる。このことばは、ある特定の時期にクラウゼヴィッツにもたらされたのだといってよい。それはおそらく、1827年からあと、1830年までのいつかであった。

第二に考えなければならないのは、『戦争論』そのものの成立事情である。

『戦争論』はクラウゼヴィッツの手でまとめられたわけではなく、彼の死後に残された草稿類を、マリー夫人が友人たちの助けを借りて、現在のようなかたちに編集したものである。したがって、そこには執筆時期が異なるいくつかの層が重ねられており、それらを精査する

材料は紛失してしまっている。このために、『戦争論』のどの部分がいつ書かれたのかは、本文を細かく調べて判断するよりない。クラウゼヴィッツ研究者を悩ませる最大の問題なのである。このことについては、少々詳しい記述を必要とするので、節を改めて論じたい。

『戦争論』第1篇第1章の成立事情

政治的交通という用語は、『戦争論』では第1篇第1章、それに第8篇第6章Bに集中して現れており、それ以外には出現していない¹⁵⁾。したがって、このふたつの章のあいだの関係が、特に問題になる。

マリー夫人は『戦争論』に寄せた「序文」(Vorrede)のあとに、1827年7月10日というはっきりした日づけを持つ「覚書」(Nachricht)と、いつ執筆されたかがこれから議論になる「未完の論考」(unvollendete Aufsatz)とを収録している(VK: 179-81, 181-3)。これからは前者を「27年覚書」、後者を「未完論考」と呼ぶことにする。両者の前後関係が重要な議題になる。「未完論考」をマリー夫人は「27年覚書」のあとに置き、「もっとずっと新しい日づけを持っていると思われる」(der, wie es scheint, von sehr neuem Datum ist)といいつて、「27年覚書」のあとに書かれたものではないかと述べていた(VK: 181)。彼女の意見は「と思われる」(wie es scheint)という挿入句にあるように、確定的なものではなかったが、そのまま多くの研究者によって決定的だとして受け入れられてきた。『戦争論』の成立史研究に重要な役割を果たしたヘルベルト・ロジンスキ(Rosinski 1935)をはじめとして、彼のその他の見解を批判したエーベルハルト・ケッセル(Kessel 1987: 122-47)も1827年以降の執筆を疑っていない。しかもケッセルはそれをクラウゼヴィッツが草稿を封印した1830年なのだと、傍証もなしに断定さえしている。かつてロジンスキの「同志」だったと語っているフランスのレイモン・アロンも、この点でロジンスキに同調している(Aron 1987a: 102)。

最大の難問は、この「未完論考」の成立年次である。というのは、そこには『戦争論』の各篇の執筆についての言及があるだけでなく、「第1篇第1章は、私が唯一完全だと考えている章(was ich als vollendet betrachte)である。少なくとも、この章は本書の全体にとっては、私がいいたるところで保持しようとした方向を示すことになろう」(VK: 181)という、かなり決定的とも思われる一文が含まれているからである。もしもこの文章が1827年以降に書かれていたのであれば、第1篇第1章は、とりあえずではあっても(1831年のあとに彼が生存していれば、さらなる推敲がありえたはずだが)、生前にクラウゼヴィッツがいたった暫定的な到達点だと考えて、そこから逆算して『戦争論』のほかの部分の評価するという手づきぎが要求されることになる。実際、そのような筋道でなされた研究がこれまでの主流だったのである。

クラウゼヴィッツは1830年8月に、ベルリンの一般軍事学校の校長という職を離れて、砲兵監に転出して、9月にはベルリンを去るが、その転出のさいに『戦争論』の草稿を封印して、もはやさらにそれに加筆する機会を失っている。それゆえに、「未完論考」は1827年7月の「覚書」のあとで、1830年までのあいだのいずれかの時期に書かれたものと推測するのが普通であった。例えば、レイモン・アロンは「第1篇第1章は、第8篇のあとに書かれており、おそらくは第8篇の修正である」と述べて、「未完論考」についても、「『27年覚書』よりも、そして、第8篇の実際の執筆よりもあと」だとしており、第1章は「最終的統合」(la synthèse finale)であって、そこから一切の理解が可能になるとしている(Aron 1978a: 101-2, 121)。「未完論考」が書かれたのはまさしく1830年だとする論者も、後を絶たない。そして、この「未完論考」が第1篇第1章を「唯一完全」だとする言明を支えているのである。

しかしながら、もはやそのような怠惰は許されないのが現状である。なぜなら、アザー・ガットが1989年に『軍事思想の諸起源』(Gat 1989)¹⁶⁾の付録「クラウゼヴィッツの最終ノート再考」において従来の定説を批判して、「未完論考」は「27年覚書」より以前、「おそらくはほんの数ヶ月前」に書かれたと主張したからである(Ibid: 256)。彼の論拠は、「未完論考」には「27年覚書」でクラウゼヴィッツが到達していた2種類の戦争という考えも、戦争は別個の手段による政治の継続にすぎないという観点も存在しておらず、後者と比較して「少々の退歩」(a slight regression)が見受けられるということにある。また、第8篇に関しては、未来形での言及しかなく、そのテキストがすでに存在していたという形跡がないとも指摘している。そのほかにもガットが挙げている理由があるが、煩雑になるので、ここでは省略したい。

私はガットの主張に基本的に賛成である。「未完論考」には確かに、「27年覚書」で示された後期クラウゼヴィッツの考えがおよそ反映されていないので、ガットの提唱には十分な正当性があると思われる。実際、彼に賛同する研究者は決して少なくない。例えば、ヒュー・スミスは「未完論考」についてのガットの意見に賛成している(Smith 2005: 63-4, 278)。さらに、ジョン・スミダがガットの考えを肯定的に捉えている(Sumida 2008: xiv-xv, 49)。ダニエル・モランも同様である(Moran 2011: 91-2)。ただし私がガットと異なるのは、彼が「未完論考」の成立をせいぜい1827年の範囲で考えているのに対して、私は用語法その他からして、その執筆時期を27年よりまえだと思っている点である。ガットは27年にクラウゼヴィッツがかなり急激に主張を変更したと見ていて¹⁷⁾、そこには戦争理論における「危機」(the crisis)があり、その結果としての「知的革命」(the intellectual revolution)が生じたと提唱している(Ibid: 204, 213)。ヒュー・ストローンも、27年に生じた「クラウゼヴィッツにおけるひとつの危機」に触れている(Strachan 2007: 77)。

そうした「認識論的切断」(ガストン・バシュラール)は一定の幅を持った時間のなかで

起こるものであって、なにも単に1827年に凝縮させてしまう必要はない。ガット自身も「危機」を強調する以外に、いかなる傍証をも提示できていないのである。とはいえ、これまで定説化されて信じ込まれてきた見解が崩されたことは大きい¹⁸⁾。

「未完論考」を1827年以前の執筆だとすると、そこにある「第1篇第1章は、私が唯一完全だと考えている章」という記述についても、かなり深刻に考え直す必要が生じる。第1巻第1章が1827年以前に執筆されているなら、それに準拠して『戦争論』の他の記述を解釈するという、これまでの手段は取れないことになってしまうからである。ストローンもこう述べている。

「『未完論考』が1830年に書かれているなら、第1篇と第8篇とのあいだでの矛盾は、3年間に及ぶ彼の思索の進展によって説明され、第1篇第1章は第8篇よりも『上級』であって、より洗練されていることになる。しかし、それが『27年覚書』に先行するのだとしたら、第8篇は非常に異なった光で照らされなければならない。そうであれば、第1篇と第8篇とのあいだでの矛盾は、単に第8篇から第1篇への移行によってだけで説明されるべきではなく、むしろ、いくつかの点で第1篇よりも決定的でありうる第8篇そのものへのさらなる作業によって説明されるべきであろう。」(Ibid: 81)

であるなら、第1篇第1章の成立過程を、乏しい資料を精査して考え直さなければならない、

実は、『戦争論』のなかにも、この第1章の形成について示唆的な若干の素材が存在しており、さらにそれに加えて、私たちにはヴェルナー・ハールヴェークが発掘してくれた『戦争論』の草稿(これを『戦争論』草稿と呼ぼう)がある。この草稿類は、比較的早くに書かれた部分と、おそらくはクラウゼヴィッツがベルリンの一般軍事学校(Allgemeine Kriegsschule)の校長となった1818年以降に執筆されたとしてよいと思われる部分とに分かれていて(Schriften 2: 22-99, 630-717)、特に問題になるのは後者である。

ハールヴェークが校閲し、私たちが基本として使う『戦争論』第19版(これを現行版と呼ぼう)の第1篇「戦争の本性について」の第1章は「戦争とはなにか」、第2章は「戦争における目的と手段」という表題を持っている。しかし、『戦争論』草稿では第1章は「戦争の目的」、第2章は「戦争の手段」である。つまり、現行版の第2章である「戦争における目的と手段」がふたつに分割されていて、「目的」が第1章に、「手段」が第2章に配置されている。

この草稿第1章「戦争の目的」は、つぎのようなパラグラフではじまる。

「私たちはここで、まずは戦争についての煩雑な公法学的定義に取り組みたいとは思わないので、戦争の基本要素、すなわち決闘に着目したい。戦争とは、++拡大された決闘以外のものではない。戦争を構成している無数の個別的な決闘は、統一体[をなしている]と見なすつもりでいるが、その場合、ふたりの決闘者を思い浮かべるのがよいだろう。おのおの

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

は相手に対して、物理的暴力を通じてみずからの意志を強要しようと努める。彼の当面の目的は、敵を打倒することであり、それによって、相手のさらなる抵抗を不可能にすることである。これが戦争の基本表象 (die Grundvorstellung des Krieges) であって、他の一切はその修正である。」(Ibid: 630)

同じような文章は現行版『戦争論』の第1章第2節に、ほぼ同文で掲げられている (VK: 191/I-1-2)。ただし、「これが戦争の基本表象云々」という文章はそこにはなく、類似した表現が第8篇第4章の冒頭に、「戦争の目標はその概念からして、常に敵の打倒でなければならない。このことは私たちが出発点とした基本表象である」(VK: 973/VIII-4)として存在している。

そして、この草稿第1章の終わり近くに、「上記が戦争の本質と目的とについての基本表象 (die Grundvorstellung von dem Wesen und Zweck des Krieges) である」という文章が置かれている (Schriften 2: 636)。ここでなぜか「本質」(Wesen) が登場していて、ここでは「目的」とともにひとつの定冠詞のもとに置かれていることに着目しておきたい。同一の表現が、現行版第3篇第16章に「戦争の本質と目的とについての章で (im Kapitel von Wesen und Zweck des Krieges) すでに述べておいたように」(VK: 409/III-16)としてあり、さらに第8篇第1章「序論」の冒頭につきのように現れている。

「戦争の本質と目的とについての章において (in dem Kapitel vom Wesen und Zweck des Krieges), 私たちは適正な基本表象 (eine richtige Grundvorstellung) に取りかかるために、戦争の全体的概念をいわば素描し、さらに、戦争とそれを取り巻く諸事物との諸関係にも言及した。私たちは悟性¹⁹⁾がそのさいにぶつかるさまざまな困難を一瞥したが、そのより厳密な考察をあとにまわし、敵の打倒、したがって、敵戦闘力の殲滅が一切の戦争行為の主要目標だという結果 [結論] で満足した。このことのおかげで、つづく諸章において、戦争行為が用いる手段は唯一戦闘のみであることが立言できたのである。かくして私たちは、さしあたっては正しい観点を獲得した。」(VK: 949/VIII-1)

つまり、クラウゼヴィッツは第1章をはじめは「戦争の目的」としながらも、それを書き進めるなかで、そこに「本質」を記述する必要を感得していったといえる。「本質と目的」をひとつの章にまとめる努力が、そのことを語ってくれている。もっとも、「本質」が切り離されて、どのように新たな章になっていったかについては、目下のところは確実なことはなにもいえない。しかしながら、新しく「本質」の部分を分離させて、それを第1章に据えたにしても、その内実をどのように満たすかについては、かなりの彼が試行錯誤を重ねたであろうことは指摘できる。

現行版第1章の表題は「戦争とはなにか」(Was ist der Krieg?) である (VK: 191/I-1) 20。「戦争とはなにか」という問いは、クラウゼヴィッツの同時代人である軍人たちの著書になんども出現している。例えばリュール・フォン・リリエンシュテルン 21 の『戦争論』

(1814年)では、「戦争について私たちがなんらかの判断を下そうとする場合、まずもって必要なのは、戦争術に関する理念を立ち上げることであり……それゆえに戦争とはなにか (Was ist der Krieg?), という設問に不可避免的に立ち戻らざるをえない」(Rühle von Lilienstern 1814: 1)といわれている。また、ロッサウ22の『戦争』(1815年)では、こうも述べられている。

「この場合、なんらかの成果がえられなければならないとしたら、全体を正しい表象へといたらせるためには、固有の熟慮を働かせるべきである。こうしたことは、戦争一般についての概念を展開することで生じる。こうした概念からは、戦争とはなにか (was der Krieg ist), 戦士はなにを欲すべきか、そして、平和時に戦争をどう習得すべきか、といった問いがはっきりと生じなければならない」(Lossau 1815: 2)。

クラウゼヴィッツとともにシャルンホルストの薫陶を受け、さらには1806年の大敗北23という屈辱を経験した世代に属する彼らが、「戦争とはなにか」という存在論的な問いにまで遡って考えるほどに事態は深刻だったのである。偉大だったフリードリヒ大王(2世)の遺産を守ることに汲々としていたプロイセンの旧守派とは異なって、この若い世代はまさしく、問題の根底まで探求する覚悟を固めていたと思われる²⁴⁾。この「戦争とはなにか」という根源的な問いは、その覚悟のほどを示しているのである。

この問いをどのようなかたちにして、どのようにそれに答えるのか。クラウゼヴィッツの思考はジグザグな道をたどっている。たとえば、おそらくはコブレンツ時代か、ベルリン時代の初期に書かれたと思われる『戦争論』草稿の第2篇第2章の部分(「戦争理論の新しい観点」²⁵⁾)には、「戦争とはなにか、戦争はどのようにでなければならないのか、戦争はなにをなしうるのか (was der Krieg ist, was der Krieg soll, was der Krieg kann) を知ることなしには、戦争指導のいかなる理論も不可能である」(Schriften 2: 654)とある。明らかに彼はここで、通俗的なカント哲学理解での sein-sollen-können という図式に沿った展開を考えていたらしい²⁶⁾。ただ、この発想は早々に抛棄されたようで、ふたたび取り上げられることはなかった。

また、第8篇第6章Bには、「私たちが第1篇第1章において列挙しておいたことだが……みずからの勢力と敵の勢力、双方を側での同盟者、[そこで] 相対する国民や政府の性格などは云々」(VK: 991/VIII-7B)という記述がある。ここで触れられている内容は、現行版の第1章とまったく関係がない。しかも、「列挙しておいた」(aufgezählt haben)という現在完了形の表現からすると、そのように書かれた草稿が存在していた可能性が示唆されているのであるが、それも現在では推測の域を出ない。いずれにしても、私たちが現存する資料から推定可能なのは、クラウゼヴィッツが第1篇第1章については、さまざまに迷いながら試行錯誤し、そこでいくつもの可能性を試していたことである。

とはいえ、第1篇第2章では、つぎのようにも述べられている。

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

「戦争とはなにか (was der Krieg ist), 戦争では目的と手段とはどのように作用するのか, 戦争がどのように現実の偏奇においては (in den Abweichung der Wirklichkeit), みずからの根源的に厳密な概念 (ursprünglich strenge Begriff) から多少とも引き離されるのか。」(VK: 230/I-2)

ここには第1篇第1章という指定はないが, 記述は大体において, 現行版『戦争論』の第1章, 第2章, そしてそれ以降の展開とはほぼ合致している。戦争の本質につづいて, 目的と手段が記述され, そこで示された「抽象的戦争」が現実においてさまざまに変容・偏倚をこうむって「現実的戦争」へと変容していく過程が素描されているのである。

ここまでの議論を整理しておこう。

クラウゼヴィッツをはじめ, 第1篇第1章を「戦争の目的」だと見なし, 第2章を「戦争の手段」に当てていた。彼は若いころから戦争術を, 戦争目的と現存する手段との合致・調整だと見なししていたので, これは当然であろう。だが, それを書き進めるなかで, そこにより根底的な考察が入り込み, このために「本質と目的」という章を立てる必要が出来た。当初は「本質と目的」でひとつの章をなすと構想されていたが, やがて「目的」は「手段」と合体して第2章になり, 「本質」は独立させられて第1章になり, いつの時点かにおいて「戦争とはなにか」という表題を獲得している。第1章がどのような内容になるのかについては不確定だった時期があり, いくつかの試行過程をへて, 最終的に現行版の第1章「戦争とはなにか」へと収束したのである。

第1篇第1章は, 従来はそれを「完全」だとするクラウゼヴィッツのことばによって, 『戦争論』の全体を読み解くための鍵になるとされてきた。だが, ガットが最初に提唱し, 私も基本において賛同するのだが, 「未完論考」が「27年覚書」以前に書かれたのであれば, 話は違って来る。そのことを「政治的交通」に立ち返って考えてみたい。

「政治的交通」の登場

第1篇第1章は, 彼が友人のグレーベン²⁷⁾ にあてた1829年11月21日づけの手紙のなかでは「私の戦争理論構築にとっての最初の礎石」(der erste Grundstein zum Bau meiner Kriegs-Theorie)とも「基石」(der Bau-Stein)²⁸⁾とも呼ばれている(Kessel 1987: 146)。この「最初の礎石」は, 少なくとも1827年以降に書かれている。というのは, 「政治的交通」という概念は「27年覚書」にも, また, 27年12月22日づけのレーダーへの手紙²⁹⁾にもまるで出現しておらず, それゆえに27年段階では彼には不在だったと思われるからである。

しかし, 第1篇第1章第24節では, こう書かれている。

「すでに見たように, 戦争は単にひとつの政治的行為であるだけでなく, ひとつの真の政

治的道具であり、政治的交通の継続 (eine Fortsetzung des politischen Verkehrs) であり、別個の手段をもってする政治的交通の遂行 (ein Durchführen desselben mit anderen Mitteln) である。そうなると戦争にまだ独自のものとして残るのは、単にその手段の独自の本性とかかわるにすぎなくなる。戦争術は一般に、また、将帥は個々の事例において、政治の方向や意図がこうした手段と矛盾しないことを要求できるのである。こうした主張は決してどうでもよいものではないが、それが個々の事例において、どれほど強く政治的意図に反作用するとしても、それはつねに、政治的意図の修正としてのみ考察されなければならない。なぜなら、政治的意図こそが目的であり、戦争は手段なのであって、目的ぬきでの手段など、まったく考えることはできないからである。」(VK: 210/I-1-24)

このことから、第1篇第1章の、少なくともこの箇所が、「未完論考」はもとより、「27年覚書」や、レーダーあての手紙よりもあとになって執筆されたと見なしてよいであろう。この第1章では、ほかの箇所でも「政治的交通」に触れたところはなく、第24節は少々異質である。ハールヴェークによる『戦争論』草稿の発表によって、私たちには部分的にはあっても、現行版との比較が可能になっているのであって、チェックしてみると、草稿のあちこちに現行版と同一の文章があることに気づく。現行版の第1章は、おそらくは何度にもわたる推敲や加筆を重ねたうえでありたっている。第1章のすべてを、同時期の執筆だとはいえないのである。

前述のように、「政治的交通」は『戦争論』では、第1篇第1章第24節以外では、「戦争は政治のひとつの道具である」という表題がある第8篇第6章Bに現われているが、他の部分にはまったく出てこない。第6章Bにおいても、「こうしたことは限りなく生じているし、また、軍事そのものへの一定の洞察が、政治的交通の指導 (die Führung des politischen Verkehrs) と隔てられるべきでないことが判明するのである」(VK: 995/VIII-8-6B) という文章を除くと、第6章Bの第1から第5パラグラフに集中的に出現している。少々長文になるが重要なので、そのところを訳出してみる。

「私たちはここまでのところ、戦争の本性と、個人および〔彼らの〕社会的結合という別個の利害関係とのあいだに存在する相克を、こうした相対立する諸要素のいずれをもおろそかにしないために、ときには前者の側から、ときには後者の側から見回さざるをえなかった。この相克は、人間そのものに基礎を置いて、哲学的悟性をもってしては解決できないものである。私たちはここで、なんらかの統一を探りたいと思う。この統一は、実生活における矛盾した諸要素を、部分的にはそれら諸要素の対立を中立化しながら、結びつけているのである。私たちがこのような統一を最初から掲げなかったのは、上記のような矛盾をまずは正しく明確に強調して、さまざまな諸要素を分離して考察したかったからである。ところで、こうした統一こそが、戦争は単に政治的交通の一部でしかなく、まったく自立したものではないという概念 (der Begriff, daß der Krieg nur ein Teil des politischen

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

..... Verkehrrs sei, also durchaus nichts Selbständiges) なのである。

確かに知ってのように、戦争は政府や国民の政治的交通を通じてのみ (nur durch den politischen Verkehr der Regierungen und der Völker) 惹き起こされるのである。とはいえ通常は、戦争 [開始] とともに、そうした交通 (jener Verkehr) は終わってしまい、[かわって] おのれに固有な法則にのみしたがう、まったく別個の状態が生起するのだと、事態を考えている。

それに対して、私たちはこう主張したい——戦争は別個の手段の介入をもってする、政治的交通の継続 (eine Fortsetzung des politischen Verkehrs mit Einmischung anderer Mittel) にほかならない。私たちが別個の手段の介入というのは、それによって同時に、ふたつのことを主張したいがためである。まず [第一には]、こうした政治的交通 (dieser politische Verkehr) は、戦争そのものによって終焉するわけではないし、なにかまったく別のものに転化するわけでもない。そうではなく [第二には]、政治的交通 (er) は、それが使う手段がどのようなものであっても、おのれの本質を保持するのであって、さらには、軍事的な出来事が継続され結合されている主要な流れが、戦争を通じて講和にまでいたるという筋道なのである。実際、それ以外に考えられるであろうか。[宣戦布告という] 外交文書によって、さまざまな国民と政府との政治的諸関係は終了してしまうのであろうか。戦争は単に、それら国民と政府との考えを、別種の文章にしたものでしかないのか。いうまでもないことだが、戦争はおのれに固有な文法を持つが、おのれに固有な論理 [学] は持たないのである。

かくして、戦争は決して政治的交通と切り離すことができないのであり (niemals von dem politischen Verkehr getrennt werden)、そうした分離が考察のなかで生じるとしたら、相互関係を結んでいる糸のすべてが引き裂かれ、意味も目的もない事物 (ein sinn- und zweckloses Ding) が立ち現われることになる。

実際、この種の表象そのものは、戦争がまったき戦争である場合、つまり、戦争が敵対性のまったく無拘束な基本要素である場合でも、不可欠であろう。というのは、戦争の土台となっていて、その基本方向を規定している一切の対象、すなわち、第1篇第1章で列举しておいたような、彼我の戦力、双方の同盟者、対立する国民や政府の性格などは、政治的な本性を持っていないであろうか。それらは政治的交通全体 (der ganze politische Verkehr) と関連しているのであって、そこから切り離すことは不可能ではないか。——とはいえ、私たちが現実的戦争は、[戦争] 概念にしたがってそうあらねばならないような、極限にまでいたる努力であるほどには首尾一貫しておらず、中途半端なもの (ein Halbding) であり、自己矛盾 (ein Widerspruch in sich) であること、また、現実的戦争そのものがそれ固有の法則にしたがってはならず、ある別個の全体の一部 (Teil eines anderen Ganzen) として考察されなければならないことを考える場合、上記のような表象様式は二重に不可欠になる

—そして、この全体が政治なのである。」(VK: 990-1/VIII-6B)

このそう長くはない文章のなかに、「政治的交通」は実に不自然なまでに多く畳みかけるように頻出しており、また、私の拙い訳文では十分に伝えられないが、文章が躍動している。さらに、私たちもたまたま経験することだが、思考がときに走りすぎて、文章が乱れ、うまく文法的に繋がらないところもある。ここからはまったくの臆見になるが、この箇所では私たちは、クラウゼヴィッツがはじめて「政治的交通」という概念に思いいたった瞬間と対面しているのではあるまいか。

おそらくクラウゼヴィッツは、第8篇の草稿を練り上げるなかで、この概念に到達したのであろう。政治のより具体的な規定として「政治的交通」を採用したと思われる。戦争との関連での政治をそのようなものとして、つまり、広義のコミュニケーションとして再把握したのであろう。

第8篇は複雑な成立事情を持ったテキストである。残念なことに、第8篇に関連したものは『戦争論』草稿には、「制限された目的を持つ戦争計画に寄せて」という、短いメモがあるだけで (Schriften 2: 675-80)、私たちに与えてくれるものは少ない。おそらく、ベルリンで大部分の草稿が書かれ、1827年以降にその一部が改訂されたはずだが、この改訂作業がどう進められたのかについては、判らないことのほうが多いのである。しかしながら、少なくとも上記の部分では、1828年以降という日づけを持っていると思われる。彼は第8篇第6章Bを執筆する過程で「政治的交通」という概念を手に入れ、それから第1篇第1章の改訂(部分的?)に取り組み、少なくともその第24節を書き上げたと考えられる。「未完論考」, 「27年覚書」, レーダーあての手紙という一連の流れのあとでようやく、「政治的交通」がクラウゼヴィッツの基本的な語彙のなかに立ち現れて、第8篇第6章Bと第1篇第1章とに姿を見せているのである。『戦争論』の各部分の執筆時期については、これまでロジンスキ以来、さまざまな論者が自分なりの推測を重ねてきたが、使われている概念のレベルにまで降りていって、限られた部分であっても厳密なテキスト解析をした作業は、これまで国際的にもほとんどなかったといってよい。

クラウゼヴィッツのいう政治については、これまで実に多様な解釈がなされてきた。ロートフェルスのように、このテーマに捧げた著作 (Rothfels 1980) を書いた研究者もいる。しかし、クラウゼヴィッツの基本的な関心が戦争に向けられていたこともあって、政治そのものの内実についての直接の言及は、決して多くない。クラウゼヴィッツは1830年の『戦争論』草稿の封印のあとまでを含めて、かなりの数の政治的発言を残しているし、『戦争論』や戦史研究でも、政治に関する多くの言及をしている。それらのなかから彼が考えていた政治なるものの輪郭を描くという作業は、まだ十分な努力を払う価値がある。

とはいえここでは、いくつかの示唆的な文章を引いておこう。「戦争とよく似た他の術を考えるなら、商取引 (der Handel) と比較するのがよい。商取引もまた、人間の利害関係

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

や活動のぶつかりあいなのである。だが、さらに戦争に近いのは政治である。もっとも、政治は一種の大規模な商取引 (eine Art Handel in großem Maßstabe) だとも見なされうる。さらには、政治とは、戦争を育てる母胎である。人間の諸特質が胚のなかにすでに潜んでいるように、政治のなかでは、戦争の容貌がすでにひそかに予示されている。」(VK: 303/II-3)

「ところで、戦争との関連における敵国とはなんであろうか。それはまずもって、敵の戦闘力であり、ついで敵の領土である。とはいえもちろん、それ以外にもまだ、個々の事情に応じて支配的な重要性を持つようになる他の多数の要素がありうるのであって、特にそこには、時には他のすべての要素よりも決定的になる、対外的・対内的な政治的相互関係 (äussere und innere politische Verhältnisse) が含まれている。とはいえ、敵国の戦闘力と領土とは敵国そのものではないし、またさらに、国家が戦争とのあいだに持ちうる一切の連関がそれらによって汲み尽くされるわけでもないが、戦闘力と領土は」VK: 808/VI-27

「政治とは、国内的な行政の一切の利害関係、さらには、人間の、またさらには、哲学的悟性の一切の利害関係を対象とし、みずからのうちでそれらを統一し精算することを前提にしている。それゆえに、政治はそれ自体では無であって、他の諸国家に対するこれらの利害関係すべての単なる代弁者でしかない。……政治はただ、社会全体の利害関係一切の代表者として考えることができる。」VK: 993/VIII-6B.

「政治的観点は開戦とともに完全に廃止されなければならないなどということは、戦争がまったくの敵対性から生じる生死を賭けた闘争である場合にのみ考える。実際のところ、すでに示しておいたように、戦争は政治そのものの発露 (Äußerungen der Politik selbst) でしかない。政治的観点の軍事的観点への下屬 (das Unterordnen des politischen Gesichtspunktes unter den militärischen) は無意味であろう。なぜなら、政治が戦争を生み出しているからである。政治は知性 (die Intelligenz) であるが、戦争は単に道具でしかなく、その反対ではない。かくして残るのは、軍事的観点の政治的観点への下屬だけである。」VK: 993/VIII-6B.

「戦争は決して自律した事物 (selbständiges Ding) ではなく、別個の手段をもってする政治の継続 (die Fortsetzung der Politik mit veränderten Mitteln) である。それゆえ、あらゆる大規模な戦略的構想の主要要素は、大部分が政治的本性からなっている。そうであればあるほど [政治的本性が大きければ大きいほど]、そこには戦争と国家との全体 (das Ganze des Krieges und Staates) がより一層含まれることになる。戦争計画の全体は、戦争に突入したふたつの国家双方の政治的な現状から、さらに、他の諸国家との彼我の相互関係から、直接に生じるのである。戦争計画から会戦計画が生まれるが、とりわけ一切がひとつの戦場に縮減される場合には、両者はしばしば同一となる。とはいえ、ある会戦の個々の部分にさえ、政治的要素 (das politische Element) が入り込んでいるのであって、会戦な

どのような、どんな大きな戦争行為にも、そのなんらかの影響が現われていないのはまれなのである。こうした意図〔観点〕からすると、大規模な戦略的全体についての純粋に軍事的な判定 (eine rein *militärische* Beurteilung) や、そうした全体についての純粋に軍事的な構想は、問題にならない。戦史を考慮しただけでも自明なのだが、こうした意図〔観点〕がまったく必要なものであることは、いかなる例証も不要であろう。もっとも、それにもかかわらずこのような意図〔観点〕が、今日にいたるまで認められていないのは、いまだになお大規模な戦略的構想における純粋に軍事的なもの (das rein *Militärische*) が、政治的なもの (das *Politische*) と分断されてしまっていて、後者がなにか不適切なもの (etwas *Ungehöriges*) であるかのように扱われてきているからである。戦争とは、異なった手段をもってする政治的努力の継続 (die Fortsetzung der politischen Bestrebungen mit veränderten Mitteln) 以外のなにものでもない。」(Zwei Briefe: 6)

「私たちとしてはさらに、つぎのように発言すべきではない。つまり、戦争を単なる暴力と撃滅の行為 (ein bloße Akt der Gewalt und der Vernichtung) と見なして、こうした単純な概念から論理的帰結として、一連の結論を引き出してしまうことである。そのような結論は、現実的戦争はひとつの政治的行為 (ein politischer Akt) であり、その法則は完全にそれ自体のうちで支えられているわけではなく (nicht ganz in sich selbst wirkt)、戦争はひとつの真の政治的道具 (ein wahres politisches Instrument) であって、それ自体で働いているのではなく、別の手によって導かれているのである。この手とは、政治のことである。」(Zwei Briefe: 8)

政治と戦争とヘーゲル

そこで素描されている政治と戦争との位置づけについては、ヘーゲルを持ち出してもよいかもしれない。クラウゼヴィッツがヘーゲルからなんらかの影響をこうむったという話は、パウル・クロイツィンガーがかつて多少とも系統的に述べていた (Creuzinger)。だが、彼の議論はいまでは取り上げるに値しない。なにしろ、肝心のヘーゲルからの引用が、直接に原典に当たったものではなく、ほとんどクノー・フィッシャーのヘーゲル伝からの孫引きなのである。最近、クラウゼヴィッツとヘーゲルとの関係については、若い研究者が意欲的な仕事をはじめているので (Cf. Herberg-Rothe 2000; Cormier 2014)、今後值得期待ことになるだろう。

ヘーゲルは1818年にベルリン大学の教授となり、29年にはその総長に就任している。クラウゼヴィッツは1818年にベルリンの一般軍事学校の校長に就任して、30年までその職にあった。両者のあいだで具体的な交流があったという証拠はないが、ベルリンの狭い社交界のなかで、なにがしかの接触があったと想定できるでだろうか³⁰⁾。いずれにしても当時の

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

ヘーゲルは、カント以来のドイツ観念論哲学の最高峰として哲学界に君臨していたので、クラウゼヴィッツがなんの関心も払っていなかったとは考えにくい。とはいえ、そうした詮索は暗黒の冥界に踏み込むことになるので、私たちは無視してよいと思われる。

肝心なのは、クラウゼヴィッツの『戦争論』において、理論的にヘーゲルの影響を感知できるかどうかである。私の答えは基本的には、ネガティブである。例えば、ヘーゲル弁証法で対立を解消するためのもっとも基本的な概念である「止揚＝揚棄」(Aufheben)³¹⁾の、『戦争論』における使用例を調べてみると、それは主に動詞 aufheben として登場し、その意味は「廃棄する」「集結する」「無効にする」などであるにすぎない (Cf. VK: 362/III-5; 600/V-16; 647/VI-8; 939; 1035/VIII-9)。名詞での Aufheben も「集結」「振り上げ」を意味しているだけである (Cf. VK: 488/IV-13; 561/V-12; 610/V-18; 917/VII-18)³²⁾。さらに、『戦争論』には「弁証法的」(dialektisch) は一度たりとも姿を見せていないし、「弁証法」(Dialektik) ということばはただ1カ所だけで姿を現すのだが、それは「戦争弁証法のこうしたつねに繰り返されるまやかし」(diese immer wiederkehrenden Spiegelfechterein der Kriegsdialektik) と、完全に否定的な使用で使われているにすぎない³³⁾。クラウゼヴィッツにとってヘーゲル哲学の基本は、こうした点でおよそ問題になっていないのである。彼は主にキーゼヴェッター経由でカント哲学に触れていたとは異なって、ヘーゲルからの具体的な影響は感知できない。ヒュー・ストローンのように、「クラウゼヴィッツは形式と方法においてカント的だったかもしれないが、彼は実質的にはしだいにヘーゲル的になった」(Strachan 2007: 90) として、ヘーゲルとの関係を保とうとする研究者もいるが、その実質に踏み込んでおらず、彼の立論は無理がある。

とはいえ、私は少なくとも、ヘーゲルの『法の哲学』(1821年に刊行)に関しては、それをクラウゼヴィッツが読んだ可能性を否定したくない。というのは、『法の哲学』での議論が、なにがしか『戦争論』に反映していると思えるからである。

クラウゼヴィッツの政治概念に関しては、これまできわめて多くが語られてきた。カール・シュミットのような人まで、その議論に加わっているほどである (Schmitt 1980)。それらをひとつひとつ検討するのは、本稿の直接の課題ではないので省略し、クラウゼヴィッツにおいて政治と戦争とが絡み合う関係性そのものに焦点を絞りたい。政治の内実を分析することはひとまず置いておいて、それに内接する戦争がどのように理論的に構造化されているのかを問うことにしたい。

クラウゼヴィッツにとって、政治はまずもって知性であった。「政治とは知性 (die Intelligenz) であって、戦争はまったくその道具にすぎず、その逆はない」(993/VIII-6B) といわれている。さらに、「戦争が出発点としている知性 (die Intelligenz, von welcher der Krieg ausgeht)」(VK: 953/VIII-2) とも語られている。出発点は知性である。しかし、この知性はなんによって具体的に担われているのか。政治とは「人格化された国家の知性」

(die Intelligenz des personifizierten Staates) (VK: 212/I-1-26) なので、要するに国家が知性ある主体として、戦争という道具を行使するわけである³⁴⁾。こうした知性が政治なのである。

この戦争に関して、クラウゼヴィッツの叙述は、特に第1篇第1章では、複合的な構造を示している。その第1節では、「私たちは[戦争という]対象の個々の基本諸要素を、ついで個々の部分ないし分節を、最後にそれらの内的連関が作る全体 (Das Ganze) を考察しようと思う。つまり、単純なものから複合的なものへと進んでゆきたい。とはいえ、ここで全体の本質へと一瞥を与えておくのも、なにがしか必要なことである」(VK: 191/I-1-1) として、戦争はまず「全体」だと把握される。別のところでは、「戦争においては、世界一般におけると同様に、一切が連関していて、ひとつの全体 (ein Ganze) に属している」(VK: 316/II-5) ともいわれている。そして、この戦争=全体という線に沿って、第1章第2節から第5節までが記述される。しかし第6節にいたると、このような議論はまったくの抽象論であって、「単なる概念からなるだけの抽象的領域」での「表象上の遊び」(ein Spiel der Vorstellungen) にすぎないとして否定される。そして、「抽象的な戦争」(VK: 216/I-2) が成り立つための3つの条件が提示され、そのひとつひとつについて、それらがいかにか非現実的な仮定であるかが論じられる(第7節から第9節まで)。戦争はその理念から抽象されるものではなく、理念からの偏倚によって判断されることになる。この偏倚・変容をもたらすのが「政治的目的」にほかならない(第11節)。そして、さまざまな検討がなされたあと、第23節で「戦争とはかくのごときものである」(so ist der Krieg) と締めくくられる。「戦争とはなにか」という問いからはじまって「戦争とはかくのごときものである」にいたって、議論は一応の完結を見る。

このように、第1篇第1章は、戦争の抽象的・極限的な規定をまず掲げたうえで、そのような規定を突き崩すことで、政治の決定的な役割を導入して、戦争が政治というより大きな世界のなかにしかないことを明らかにしている。ただし、これからは真に検討されるべきことなのだが、ここではまだ、戦争と政治との理論的な関係性が論じられていない。それを明示しているのが、第8篇での断片的な議論である。すでに述べておいたように、第1篇第1章を特権化していた従来の見解では、そのことははっきりと理解できないのである。

では、第8篇でなにが変わったのか。それは戦争ではなく政治を「全体」だと明確にする態度の登場である。戦争がまずは「全体」として把握されたことを大前提として、それがひとつの「全体」でありながらも、しかし、さらに大きな「全体」に内属しているという主張は、第8篇にしか出現しない。第1篇第1章では、戦争がひとつの全体だとする視点は明示されていたし、第2篇第5章にも「戦争においては、世界一般におけると同様に、一切が連関のなかにあつて、ひとつの全体 (ein Ganze) に所属している」(VK: 316/II-5) という記述がある。また、第6篇第27章には、「戦争においては、他のいかなる分野においてよりも、

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

部分は全体によって規定されている (die Teile durch das Ganze bestimmt) (VK: 807/VI-27) との1節が含まれている。また、1830年12月19日のグナイゼナウへの手紙では、「ひとつの自立した全体、つまり、しばしば孤立して行動せざるをえない状態になる全体 (ein selbständiges Ganze, d. h. ein solches, was häufig in den Fall kommen soll isoliert zu handeln) は、一部を前衛として規定し、一部を予備として拘置する必要を常に持っている」(Schriften 2: 607) とされている。この戦争=全体という主張は、確固たるものとしてクラウゼヴィッツに現存しているのである。

しかし、第4篇第8章では、「とはいえ、戦闘は非常に修正された決闘であり、その基礎にあるのは、単なる相互的な闘争欲望、つまり、相互的な[闘争]承諾だけでなく、戦闘に結びついているさまざまな目的でもある。これらの目的はつねに、より大きな全体に所属している (einem größeren Ganzen angehören) のであって、さらには、戦闘単位と見なされた戦争全体が、より大きな全体に属する政治的な目的や制限を持てば、より一層そうなる。」(VK: 449/IV-8) と、戦争が「より大きな全体」を持つとされている。そして、第8篇第6章Bという、おそらくは第1篇第1章よりもあとに書かれたと推測可能な箇所³⁵⁾には、つぎのような文章が存在する。

「現実的戦争そのものがそれ固有の法則にしたがってはならず、ある別個の全体の一部として (als Teil eines anderen Ganzen) 考察されなければならないのであり——この全体が政治なのである (und dieses Ganze ist die Politik)。」(VK: 991/VIII-6B)

「ひとつの有機的な全体としての戦争」(VK: 993-4/VIII-6B) という観点が保持されたままで、つまり、戦争=全体とされると同時に、政治=全体が語られている。全体のなかにある全体という、非常に矛盾した立論である。

このことを混乱することなく解決する鍵は、ヘーゲルに求めることができる。というより、ヘーゲルを参照してはじめて理解できると思われるのである。

ヘーゲルの哲学体系は、なんども彼自身によって推敲され改訂されてきているが、一応は『エンチュクロペディー』(初版・1817年)としてまとめられたものを、本稿では基本とする。これは彼の生前、第3版(1830年)まで出版されている。その全体に対する「序論」において、つぎのように述べられている。

「哲学のどの部分も、ひとつの哲学的全体 (ein philosophisches Ganze) であって、それ自体のうちで完結した円環であるが、しかし、哲学的理念はそこにおいては、ひとつの特殊な規定性ないし要素のうちにある。とはいえ、個々の円環は、おのれの全体性なのであり、その諸要素の制限でもあるがゆえに、それを突き破ってより広範な領域を基礎づけている。したがって、全体は、おのおのが必然的な契機をなしている、いくつもの円環からなるひとつの円環 (ein Kreis von Kreisen) として現われ、したがって、これら円環に固有な諸要素の体系が、個々の要素のなかに現象している完全な理念となっている。」(Hegel 1970a: 60)

[邦訳, 上巻: 85]

部分が全体を描く円環でありながらもなお、さらに大きな円環=全体に下属するという発想は、ヘーゲルに特有なものである。ヘーゲル哲学の諸分枝は、こうした観点のもとで統一されているが、それをもっとも明瞭に示しているのが、彼の『法の哲学』にほかならない。

『法の哲学』においても、哲学が「ひとつの円環」であることが強調されている。「哲学はひとつの円環をなしている」のである (Hegel 1970b: 30 [邦訳, I: 49])。では、この円環のなかで、法の哲学的探求は、どのような位置を占めているのか。まず、「法学は哲学のひとつの部分 (ein Teil der Philosophie) である」と宣言される。しかし、それはまたひとつの円環であって、つまりは全体である。全体に内接する全体が可能になるのは、その出発点があらかじめより大きな全体によって与えられているからにほかならない。ヘーゲルはいう。

「法学は部分としては、ある特定の[・]出[・]発[・]点[・] (*Anfangspunkt*) を持っていて、それは法学に[・]先[・]行[・]す[・]る[・] (*vorhergeht*) 部分の結果であり真理であって、また、出発点のいわゆる[・]証[・]明[・]なのである。したがって、法という概念は、その[・]生[・]成[・]からして法学の外部に (außerhalb) にあり、その演繹はここでは前提されていて、つまりは、[・]所[・]与[・]として (*als gegeben*) 受け入れなければならない。」 (Ibid: 30 [邦訳: 46])

すなわち、法学という円環は、その外部にあって所与とされる前提を出発点にして描かれるわけである。これに対して、哲学には「ひとつの最初のもの、無媒介なもの」 (ein Erstes, Unmittelbares) があるにすぎない。要するに、法学はその外部から与えられた出発点を持つが、哲学の出発点はあらかじめ規定されていない。この出発点に関しては、ヘーゲルの『精神現象学』や『大論理学』での議論などもかかわる大きな論争があるが、すべて省略する。私たちとしては、大いなる円環がそこに含まれる円環の外的な出発点を構成しているというヘーゲルの考えを確認するだけで満足したい。

クラウゼヴィッツが政治=全体と戦争=全体との矛盾した関係を提起するさいに、果たしてヘーゲルを意識していたかどうかは、確定的ではない。フランスでクラウゼヴィッツの選集を編んだマリールーズ・シュタインハウザー (彼女はカール・シュミットの研究者でもある) は、ヘーゲルの影響については否定的で、両者のあいだにはドイツ・ロマン主義という、共通した思想源泉があったことを指摘している (Clausewitz 1976: 379)。それを無視するわけではないが、クラウゼヴィッツの「矛盾」を解消するためには、ヘーゲルの法学と哲学との位置づけをいわば借用して考えることが有益なのである。『戦争論』でのつぎの文章は、ヘーゲルとの関係を考慮するなら、より一層理解できよう。

「再度、述べておこう。戦争とは政治の道具であり、必然的に政治の性格を帯びざるをえないので、政治という尺度をもって測られなければならない。それゆえに、戦争指導は、その基本輪郭においては政治そのものであって、戦争はペンの代わりに剣を持つが、だからといって、政治に固有な法則にしたがって思考すること (nach ihren eigenen Gesetzen zu

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

denken) を止めるわけではない。」(VK: 998/VIII-6B)

最後に

では、私たちはなにを達成したのであろうか。

第1に、「政治的交通」という概念が、おそらくはクラウゼヴィッツにおいては、1827年以降に思いつかれたという推定である。そこから判るのは、第1篇第1章で「政治的交通」が唯一出現する第24節は、27年よりあとの加筆部分であって、「未完論考」で彼が第1篇第1章を「私が完全だと見なす唯一の章」と述べていたにもかかわらず、それが少しも「完成」していなかったことである。「未完論考」は「27年覚書」よりもまえに成立していたというガットの見解は、それによって補強される。

第2に、戦争=全体を包摂する政治=全体という発想が登場するのは、第8篇の一部に限られており、その部分は政治=全体とする発想が見られない第1篇第1章よりあとに書かれた可能性が高いことである。それは「政治的交通」概念を記述する部分と重なり合っているので、この概念の獲得とほぼ同期になされていると推量される。また、この点でヘーゲルとのかかわりが感得される。

以上が、本稿がもたらすであろう、クラウゼヴィッツ研究へのささやかな寄与である。『戦争論』は、繰り返すが、複雑な成立事情を持っている。その執筆はジグザクな行程をたどっている。この曲がりくねった道筋を明らかにすることなく同書に取り組めば、解釈にさいして大きな過ちを犯しうる。幸いにして、21世紀のクラウゼヴィッツ研究では、テキストの厳密な解析（それは『戦争論』をなによりもドイツ語で丁寧に読むことから始まる）が進みつつあり、そうした進捗に歩調を合わせる研究が、日本でもはじまることが期待されているのである。

注

- 1) 最近のヘルベルク＝ローテの研究でさえ、「政治的交通」はことばとして
- 2) これらの翻訳のいずれにも私は満足できないので、本稿ではすべて、ヴェルナー・ハールヴェークが校訂した『戦争論』第19版 (Clausewitz 1980) から新たに訳出した。他の論考にしても同様である。翻訳にさいしては、隔字体になっている箇所は、翻訳では傍点をつけ、原文引用のさいにはイタリックで表示する。クラウゼヴィッツのテキストが主に草稿からなっているため、十分に意味が取れない箇所があるので、[]に入れて文章を補ったところがある。『戦争論』については、初版 (HW 1-3)、第2版 (Clausewitz 1853)、第3版 (Clausewitz 1867-9)、さらには目下入手可能なウルシュタイン版、レクラム版、シュトゥンプフ版をも参照している。なお、シュトゥンプフの編纂になる版 (Clausewitz 1993) は特に重要で、概念史 (Begriffsgeschichte) にもとづく貴重な註釈が数多く含まれている。

- 3) このことは翻訳書におけるとてつもない貧困をも招いている。ピーター・パレットの名著『クラウゼヴィッツと国家』(Paret 1985)の邦訳(『クラウゼヴィッツ 『戦争論』の誕生』白須英子訳, 中公文庫)は、まったく使いものにならないほどひどいので論外だとしても、最近紹介されたベアトリス・ホイザーの研究(Heuser 2002)の訳本(『クラウゼヴィッツの「正しい読み方』奥山真司・中谷寛士訳, 芙蓉書房出版)でも、ドイツやフランスの固有名詞表記はしばしばでたらめで(若干の例を挙げると、マグデブルクがマグデバーク, ベーレンホルストがベルンホルスト, エーベルハルトがエイベルハート, ケンメラーがカーメラー, リューレ・フォン・リリエンシュテルンがルール・フォン・リリエンシュターナー, アンシヨンがアンキロン, ロカンクールがロカンコート, デュパルクがドピック, ジラルデがギラードといった具合である), さらには「概念」(Begriff)が「真相」にされているのには絶句する。ホイザー自身はBegriffをきちんとconceptと訳しており, また, 「戦争の本質」(the essence of war)に関して「彼[クラウゼヴィッツ]はBegriffという用語を当てている」といっているにすぎない(Ibid: 40, 41)。もっとも, 『【新訳】戦争論』(兵頭二十八「訳」, PHP研究所)という, 恐ろしく珍妙な「トンデモ訳」が堂々と出版されているのを見れば, 驚くには値しないかもしれない。なにしろこの「訳者」によると, Vom Kriegeという『戦争論』の表題には定冠詞が含まれていない! そうなのである。
- 4) 『戦争論』が世界各国に与えた影響については, ウルリヒ・マールヴェーデル(Marwedel 1978)やヴェルナー・ハールヴェーク(VK: 1-120, 1253-339)に概観があるが, いまではさらに詳細な個別研究が, クリストファー・バスフォードの単著『英語圏でのクラウゼヴィッツ』(Bassford 1994)をはじめ, 多く発表されている。とりあえずの状況に関しては, ライナー・ボンメリンの編集になる『クラウゼヴィッツはグローバルになる』(Pommerin (ed.) 2014)を参照。そこでは, オーストリア, ベルギー, 中国, デンマーク, フィンランド, フランス, ドイツ, イスラエル, イタリア, 日本, オランダ, ノルウェー, スロヴェニア, 南アメリカ, スペイン, スウェーデン, スイス, 米国が取り上げられている。
- 5) リュストウはプロイセンの軍人だったが, 1848年革命にさいして, 急進民主主義派として活動したため, のちに軍事裁判にかけられ, スイスに亡命している。フェルディナンド・ラッサールとも交流があり, イタリア統一戦争ではガリバルディの参謀を勤めた。しかし, 彼が同書で「クラウゼヴィッツとヴィリゼン」という章を立てて, 日本ではまったく知られていないヴィリゼンという軍事思想家を前景化して, のちのプロイセンの公式見解として流通してきたクラウゼヴィッツとモルトケの連続性神話に釘を刺したことは高く評価されるべきであろう。日本ではいまだに両者を直線で結んで, ドイツ参謀本部の自己神話から抜け出せないでいる記述がまかり通っている。
- 6) カントには「社交能力」(die Kommunikabilität)としてしか出現しない(Kant, Logik, WA VI: 471)。
- 7) *Universal=Lexikon der Gegenwart und Vergangenheit*, hrsg. von H. A. Pierer, 3. Aufl., Bd. 70, Altenburg: H. A. Pierer, 1832. ピーラーはVerkehrにHandel und Wandelという説明しか与えていない。
- 8) 『ドイツ・イデオロギー』での交通概念は, いまだに十分に考察されていない。もっとも, 『ドイツ・イデオロギー』のあと, 交通はその重要性を失ってしまう。
- 9) リューレ・フォン・リリエンシュテルン(Otto August Rühle von Lilienstern, 1780-1847)は

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

プロイセンの軍人で著述家。クラウゼヴィッツと同年の生まれで、ともにシャルンホルストの薫陶を受けた。ゲーテのサークルにも加わるといった、とにかく多様な才能の持ち主であった。作家のハインリヒ・フォン・クライストと親交を結び、彼との往復書簡は有名である。『戦争論』(Vom Kriege, 1814)などの多数の著書がある。フリードリヒ・シュレーゲルが編集した『ドイツ博物館』に発表した論文「戦争の擁護」は、カントの恒久平和論への正面切った反論で、そこにのちのプロイセン軍国主義の萌芽が見て取れるとも評価されている。グロールマン退任のあとを受けて、1819年には陸軍省第2局(のちに参謀本部となる)の局長に就任したが、すぐに辞任している。陸軍大学校校長、陸軍教育総監を歴任した。

- 10) シュトゥンプフはそれを「まずもって外交関係」だとしながらも、19世紀前半に政治概念とされていたのは、1)には国家学の核心、2)には対内的・対外的な実践政策、3)には政治的手段の総体、だと述べて、このうちの2)がクラウゼヴィッツのいう「政治的交通」に当たるとしている(Clausewitz 1993: 856, 858-9)。もっとも、シュトゥンプフは「政治的交通」が『戦争論』の成立に持つ意義には注目していない。アンデルス・バルムグレンも「交通」が持つ広い意味に着目しているが(Palmgren 2011: 67-8)、それ以上を出ない。

- 11) 『遺稿集』(*Hinterlassene Werke des Generals Carl von Clausewitz über Krieg und Kriegführung*)は、クラウゼヴィッツの没後、マリー夫人と友人たちの尽力で編纂され、全10巻として公刊された(1832-37年)。この最初の3巻が、『戦争論』である。『遺稿集』の残り7巻はすべてが戦史研究で、つぎのような構成になっている。

第4巻「1796年の対イタリア戦役」

第5巻「1799年の対イタリアおよび対スイスの戦役」

第6巻「1799年の対イタリアおよび対スイスの戦役」(続編)

第7巻「1812-13年の対ロシア戦役と1814年の対フランス戦役」

第8巻「1815年の対フランス戦役」

第9巻「グスタフ・アドルフ、ルイ14世の対オランダ戦役、チュレンス、リュクサンブールその他の諸戦役の戦略的解明」

第10巻「ソビエスキ、ミュニヒ、フリードリヒ大王、カール・フォン・ブラウンシュヴァイク大公その他の諸戦役の戦略的解明」

ただし、マリー夫人は1836年に没しているので、『遺稿集』の最後の2巻は友人たちの手になる。幸いなことに、マリー・フォン・クラウゼヴィッツについては、ヴァーニャ・エフティモヴァ・ベリンジャーによる詳細な伝記が最近公表されていて(Bellinger 2016)、そのなかで『戦争論』を含む編纂の過程が一部明らかになった。マリー夫人の残された遺稿は、さらなる探求に値する。

- 12) この『対フランス戦役』の草稿が、ハールヴェークによって公刊されているが、当該箇所は『遺稿集』とまったく同文である(Cf. Schriften 2: 1086)。
- 13) 日本では「皇太子御進講録」と訳されているのが普通だが(『戦略論体系②クラウゼヴィッツ』川村康之編著、芙蓉書房出版、2001年、を参照)、当時のプロイセンはただの王国であって、当然、皇帝も皇太子も存在しない。ここでは日本で歴史的にもあった王太子という訳語が妥当である。
- 14) ケンメラーはクラウゼヴィッツ家の許可をえて、草稿類を直接に調査できた。彼以前には、シュヴァルツによるクラウゼヴィッツの資料的には貴重だが、凡庸な伝記(Schwartz 1878)が

ある。ケンメラのあと、カール・リンネバハ (Linnebach (hrsg) 1917), ハンス・ロートフェルス (Clausewitz 1922), ヴァルター・シェーリング (Clausewitz 1941) がこの草稿類をじかに利用しているが、いずれもこの問題についてはまるで情報を与えてくれない。クラウゼヴィッツが残した文書は、エーベルハルト・ケッセルが伝えてくれるところによると、第二次大戦後にソ連軍に押収され、以来行方不明になっているとのことである (Kessel 1987: 123)。いつの日か、旧赤軍のどこかの文書庫で発見されるかもしれないが、それを期待するわけにはいかない。シャルンホルストやグナイゼナウの文書はそのような扱いを受けていないので、クラウゼヴィッツはソ連赤軍にとって、なにか特別な意味を持っていたようである。

- 15) なお、第1篇第2章には「人間的交通」という表現もある。「私たちはまた、戦争においては目標にいたる途は多くあり、敵の打倒はいかなる場合にも問題になるわけではないこと、さらには、敵戦闘力の撃滅、敵の地方の征服、その単なる占領や侵略、直接に政治的効果を目指した企図、敵の攻撃への受動的な待ち受けといったすべてのことが、おのおの敵の意志に打ち勝つために使用できる手段であることを理解している。おのおのの特質に応じて、そのうちのどれかが呼び出されるのである。私たちはまた、目標にいたるための近道として、多様な目的を付け加えることができるが、それを私たちは対人論法 (Argumente ad hominem) と呼ぶことができよう。人的つながりの [あいだで飛び散る] 火花が、いかなる即物的な相互関係をも燃え上がらせないように、人間的交通 (menschlicher Verkehr) のどんな領域があるだろうか。戦争においては、闘うものたちの人格性 [個性] が、内閣においてであれ戦場においてであれ、きわめて大きな役割を演じうるのであって、こうした火花がわずかでも欠けることはまるでありえない。」(VK: 221/I-2) さらに、第1篇第3章でも、「戦争とは人間的交通のひとつの行為 (ein Akt des menschlichen Verkehrs) である」(VK: 303/I-3) ともいわれている。この「人間的交通」という表現は、ほかのどこにもなく、さらなる追求を要請している。「人間的交通」は、「政治的通信」の前段階での表現だった可能性があることを指摘しておきたい。『戦争論』での Verkehr の現出はそのほかにもないわけではないが、本稿での主題とまるで関わりがないので無視したい。

ついでながら、上記の第2章の文章に出ている「対人論法」は、これまでの日本語訳ではすべてまるで正確に訳されていない。そこでいう ad hominem とはラテン語で「人に即した」「人に応じた」であって、いうなれば「人を見て法 (のり) を説け」という論法である。キーゼヴェッターは論理学の入門書で、「他人を主観的根拠をもって (ex concessis) 論駁し、相手を説き伏せるのであれば、論駁は kat' anthropon (ad hominem) と呼ばれる。それに対して、客観的根拠で論駁し、相手を納得させるなら、論駁は kat' alethein (ad veritatem) と呼ばれる。後者のみが真の論駁である」(Kiesewetter 1832: 154) といっている。「真理に即した」(ad veritatem) とは人々の同意を必要とせずに、普遍的・絶対的に妥当するが、それとは異なって、「対人論法」のほうは、かのソフィストの議論のように、一定の人々の賛同をえればそれで充分なのである。

- 16) 本書は彼のより広範な軍事思想史 (Gat 2001) に組み込まれているが、本稿では初出のものを使う。
- 17) クラウゼヴィッツは1827年夏まえに、かなり重い病気にかかっていたことが、グナイゼナウあての手紙などで判っている。ガットはどうも、それが転機となったと見ているようである。
- 18) クリストファー・バースフォードはまったく論拠を示さないで、ガットを罵倒に近いことばで非

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

難している (Bassford: 2007: 74)。定説となったものの惰性的な力に対抗するのは、かくも困難なのである。

- 19) 『戦争論』で基本主体としていたるところで動きまわっているのが「悟性」(der Verstand)であることに注目すべきである。カント哲学の重要な貢献が、理性と悟性との分離把握にあったことは、ヘーゲルも強調している (Hegel1970a: 121 [邦訳, 上巻: 178])。これに対して、クラウゼヴィッツにはそのような観点はまるで見受けられない。理性 (die Vernunft) という名詞は『戦争論』では、4カ所で使われているが (VK: 408/III-15; 857/VI-857; 891/VII-10; 988/VIII-6)、いずれにおいても悟性との緊張関係とは無縁で、カントの感触さえ感じられない。最近のアントウリオ・エチェバリアの研究は、クラウゼヴィッツへのカントの影響 (キーゼヴェッター経由) を重視している (Echevarria 2007)。確かにそれは、かつて新カント派の驍将ヘルマン・コーヘンが「[実際のところ、一切的方法的基本問題にあってカント的側面からの息吹を感じ取ることなしには、『戦争論』という労作を読むことはできない] (Cohen 1883: 32) としながらも、内容的にかなり粗末な言及に留まっていることと比べると、主としてキーゼヴェッターの『論理学』(Kiesewetter) とクラウゼヴィッツの主張を丁寧に対比しながら、両者の関係を解明しようとしている。クラウゼヴィッツのカント批判哲学との関連は、まだ探索の余地がある。インターネット上で Aetas Kantiana の一部として、キーゼヴェッターのいくつもの著作が PDF ファイルで読めるようになっているので (Cf. https://de.wikisource.org/wiki/Aetas_Kantiana), これからの仕事になろう。フリードリヒ・エンゲルスはマルクスへの手紙のひとつ (1858年1月7日づけ) で、クラウゼヴィッツについて「風変わりな哲学の仕方」(sonderbare Art zu philosophieren) の持ち主だと述べていた。エンゲルスはもともとヘーゲル左派として出発した人で、その後も同時代の哲学に広く目配りしており (『反デューリング論』や遺稿『自然弁証法』を参照されたい)、19世紀ドイツ哲学の諸潮流を知悉していたのだが、その彼が「風変わりな」というほどクラウゼヴィッツの思想には独特なものがあるのであって、それをただカントやヘーゲルに簡単に縮減できるものではないことは、はっきりしている。さらなる探求が要請されている。
- 20) 初版 (HW 1: 3) では、疑問符はついていない。疑問符がつけられるようになったのは、第2版 (1853年) からであって (Clausewitz 1853), それからずっと疑問符はつけられており、ハールヴェークも現行版でそれを踏襲している。これに対して、シュトゥンプフやレクラム版は初版に忠実に疑問符を省いている。
- 21) リューレ・フォン・リリエンシュテルン (Otto August Rühle von Lilienstern, 1780-1847) プロイセンの軍人で著述家。クラウゼヴィッツと同年の生まれで、ともにシャルンホルストに学んでいた。ゲーテのサークルにも加わるといった、とにかく多様な才能の持ち主であった。作家のハインリヒ・フォン・クライストと親交を結び、彼との往復書簡は有名である。『戦争論』(Vom Kriege, 1814) などの多数の著書がある。フリードリヒ・シュレーゲルが編集した『ドイツ博物館』に発表した論文「戦争の擁護」は、カントの恒久平和論への正面切った反論で、そこにのちのプロイセンの軍国主義の萌芽が見て取れる。グロールマン退任のあとを受けて、1819年には陸軍省第2局 (のちに参謀本部となる) の局長に就任したが、すぐに辞任している。陸軍大学校校長 (1837-47), 陸軍教育総監 (1844-47年)。
- 22) ロッサウ (Johann Friedrich Constantin von Lossau, 1767-1848) プロイセンの軍人・著述家で、シャルンホルストの弟子。『戦争』(Der Krieg, 1815) などの著作がある。思想傾向は比

- 較的保守的である。
- 23) プロイセンは1806年10月14日に行われたイエナとアウアーシュテットでの二重会戦において、ナポレオンに決定的な敗北を喫し、屈辱的な講和を強いられた。クラウゼヴィッツ自身も、その結果捕虜になった。彼はこの敗北の原因について、直後と1820年代はじめに、深刻な議論を行っている (VKS: 95-125, 303-492)。1806年がプロイセンにもたらした知的衝撃については、パレットの著書 (Paret 2009) が有益である。
- 24) この世代的な断絶と対立をうまく橋渡してくれたのが、ゲーブハルト・フォン・シャルンホルストであった。彼が組織した「軍事協会」(die militärische Gesellschaft)の会員名簿 (White 1989: 201-11)を見ると、そこには旧守派と改革派が絶妙なバランスで並んでいる。また、彼は例えば師団組織の導入に関しても、それがフランスのド・プロイ元帥が制度としてはじめたことを巧妙に隠蔽して、すでにプロイセンでその前に、7年戦争のさいフェルディナント大公が先鞭をつけていたということで (Scharnhorst 1983: 143-6)、無用な摩擦の回避に努めている。シャルンホルストは軍事理論について、まとまった議論を残していないので、あちこちでの言及からそれを再構成するしかない。幸い全8巻の『私的・公的著作集』が最近刊行されたので (Scharnhorst 2002-14)、その課題は以前より容易になった。ただし、私はこの大部の著書をまだ十分に利用できていない。
- 25) この文章はすでに1941年にヴァルター・シェーリングによって公表されている (Clausewitz 1941: 309-11)。これをハールヴェークの校閲文と比較すれば、シェーリングというナチスの御用学者が、どれほど対象に対して不誠実であったかが判明する。彼はクラウゼヴィッツ解釈に怪しげな生の哲学を混ぜ込んで国防哲学 (Wehrphilosophie) なるものをでっちあげ、ベルリンで教授職を獲得した (Baldwin 1981: 20-1)。しかし、クラウゼヴィッツのかなり重要な論考「芸術および芸術理論について」は、彼のいいかげんに編集したものでしか私たちには読めない (Clausewitz 1941: 152-66)。
- 26) この直後には、「19世紀の戦争、ボナパルトの破壊的な戦争は、戦争がどうありうるか (was der Krieg sein kann) を示している」(Schriften 2: 654)とあって、ナポレオンによって導入された新しいタイプの戦争が、クラウゼヴィッツが当時考えていた絶対的戦争という理念型に合致しようと想定されている。
- 27) グレーベン (Carl, Graf von der Gröben, 1788-1876) は、プロイセンの軍人。後に将軍 (騎兵)。1812年には、ロシア軍に加わる。のちにプロイセン軍に復帰し、ライプツィヒ、ワーテルローなどの会戦に参加。1829年には王太子の第一副官となる。クラウゼヴィッツの友人であり、彼の死後、『遺稿集』の編纂に協力した。
- 28) ケッセルはそこに註記して、「おそらく第1篇第1章の中間表題 (die Zwischentitel) である」と述べているが、それはありえない。これまで議論してきたように、第1章の表題は「本質と目的」の「本質」が分離してできたものであって、「基石」という表現は比喩的なものでしかない。
- 29) この手紙の存在は、すでにマクス・イエンスがああ恐ろしいまでに浩瀚な『戦争科学の歴史』第3部で、すでに1891年にその存在を教えてくれていた (Jähns 1891: 2856)。しかし、刊行されたのは1937年になってからである (Zwei Briefe)。そこに収録されたのは、ともにカール・フェルディナント・フォン・レーダー少佐にあてられた手紙で、最初の手紙の日づけは、1827年12月22日、第二のそれはすぐあとの24日である。レーダーは当時、プロイセン

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

参謀本部にあって「中部戦場部長」(Chef des mittleren Kriegstheaters)を勤めていた。つまり、主としてオーストリアとの戦争にさいしての作戦計画を練り上げることが、彼の基本職責であった。レーダーは1787年生まれなので、ちょうど40歳であった。

この時期、プロイセンの陸軍参謀総長であったフリードリヒ・カール・フォン・ミュフリンク中将は、オーストリアがザクセンと同盟しながら、プロイセンに侵攻するという想定をもとにした防衛計画を、レーダーに策定するように命じた。ミュフリンクが提示した課題は具体的には、オーストリアが13万の部隊をもって、ドナウを越えてベーメンを目指した攻勢に出た場合の、ありうる敵の作戦計画と、その時間的・空間的な展開、そして、それに対するプロイセンの防衛計画であった。レーダーは自分の計画案と、「M」という軍人(ピーター・パレットはおそらく参謀本部にいたモンツ大尉だと推測している)の案とをクラウゼヴィッツに送付して、彼の見解を求めたのである。

クラウゼヴィッツは第1の手紙の冒頭で、当時到達していた自分の考えを要約してレーダーに送っており、成熟期のクラウゼヴィッツを理解するためには必読の文献である。日本ではまったく紹介されていない。1984年には英語で全訳されている(Cf. Paret 1992: 123-9)。

- 30) ストーカーによる最新のクラウゼヴィッツ伝(Stoker)にも、両者の接触はきされていない。
- 31) もっとも、ヘーゲルにおいてAufhebungが頻繁に使われていたとはいえない。これはSuhrkamp版のヘーゲル著作集全20巻につけられた語彙索引からも明らかである。
- 32) ヘーゲルのaufhebenについての簡略な定義は、いわゆる『小論理学』第96節補遺で与えられている(Hegel 1970a: 204-5 [邦訳, 上巻, 294-5])。
- 33) ここでいわれている「戦争弁証法」なるものは、ゲオルク・ウェントゥリーニの『戦略教説』第2巻の副題「戦争弁証法」(Venturini 1800)へのあてつけであろう。クラウゼヴィッツは早くから、ウェントゥリーニの哲学を装った通俗性に批判的であった(Cf. Vks: 46)。
- 34) クラウゼヴィッツにとって、知性の主体としての国家は、近代においてはじめて成立する。近代以前での国家は、「単純で論理的な法則にしたがって行動するひとつの知性(eine Intelligenz...die nach einfachen logischen Gesetzen handelt)だと見なすわけにはいかない」(VK: 964-5/VIII-8B)のである。なお、「人格化された国家」という表現には、クラウゼヴィッツが確実に読んだはずのカントの『恒久平和のために』(1795年)における、国家は「物件」ではなく「道徳的人格」(eine moralische Person)だとする議論(Kant, WA XI: 197)の影響を見て取ってよいのではないか。
- 35) しかしながら、第8篇第6章Bには、「戦争は政治に属しているので、政治の性格を帯びることになる。政治が強大かつ強力になればなるほど、戦争もそうなるのであって、こうしたことが高度にまで高まりうるなら、戦争はその絶対的形象(seine absolute Gestalt)をうるのである」(VK: 992/VIII-6B)といった、絶対的戦争という理解も存在しているので、そのすべてを単一の時代のものだとはいえない。

参考文献

- Aron, Raymond
1987a *Penser la guerre, Clausewitz*, tome 1, Paris: Gallimard.
1987b *Sur Clausewitz*, Bruxelles: Complex.

- Bassforf, Christopher
 1994 *Clausewitz in English: The Reception of Clausewitz in Britain and America 1815-1945*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- 2007 "The Primacy of Policy and the 'Trinity' in Clausewitz's Mature Thought," in: *Clausewitz in the Twenty-First Century*, ed. by Hew Strachan and Andreas Herberg-Rothe, Oxford: Oxford Univ. Press, pp. 74-90.
- Baldwin, P. M.
 1981 "Clausewitz in Nazi Germany," *Journal of Contemporary History*, 16, pp. 5-26.
- Bellinger, Vanya Eftimova
 2016 *Marie von Clausewitz. The Woman Behind the Making of On War*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Caemmeler, Rudolph von
 1905 *Clausewitz*, Berlin: B. Behr' Verlag.
- Clausewitz, Carl von
 1832-37 *Hinterlassene Werke von General Carl von Clausewitz*, 10 Bde, Berlin: Ferdinand Dümmler. (本文中では HW として引用)
- 1853 *Vom Kriege*, 2. Aufl., 3 Bde, Berlin: Ferdinand Dümmler.
- 1867-69 *Vom Kriege*, 3. Aufl., 3 Bde, Berlin: Ferdinand Dümmler.
- 1922 *Politische Schriften und Briefe*, hrsg. von Hans Rothfels, München: Drei Masken.
- 1937 *Zwei Briefe des Generals von Clausewitz. Gedanken zur Abwehr.*, Sonderheft zu Militärwissenschaftliche Rundschau, Berlin: E. S. Mittler & Sohn. (本文中では Zwei Briefe として引用)
- 1941 *Geist und Tat. Das Vermächtnis des Soldaten und Denkers*, hrsg. von Walter Malmsten Schering, Stuttgart: Alfred Kröner.
- 1966-1990 *Schriften Aufsätze, Studien, Briefe*, 2 Bde in 3 Teilen, hrsg. von Werner Hahlweg, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. (本文中では Schriften として引用)
- 1976 *De la Révolution à la Restauration. Ecrits et lettres*, trad. par Marie-Louise Steinhauser, Paris: Gallimard.
- 1979 *Verstreute kleine Schriften*, hrsg. von Werner Hahlweg, Osnabrück: Biblio Verlag. (本文中では Vks として引用)
- 1980 *Vom Kriege*, 19. Aufl., hrsg. von Werner Hahlweg, Bonn: Ferdinand Dümmler. (本文中では VK として引用し、さらに篇・章 (ある場合には節も) を付記する)
- 1993 *Kriegstheorie und Kriegsgeschichte*, hrsg. von Reinhard Stumpf, Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag.
- Cohen, Hermann
 1883 *Von Kants Einfluß auf die deutsche Kultur*, Berlin: Friedrich Dümmler.
- Cormier, Youri
 2014 "Hegel and Clausewitz," *International History Review*, 36, pp. 419-42.
- Creuzinger, Paul
 1911 *Hegels Einfluß auf Clausewitz*, Berlin: R. Eisenschmidt.
- Decker, Karl von

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

- 1828 *Der kleine Krieg, im Geiste der neueren Kriegführung*, Berlin/Posen/Bromberg: Ernst Siegfried Mittler.
- Echevarria, Antulio
- 2007 *Clausewitz and Contemporary War*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Gat, Azar
- 1989 *The Origins of Military Thought from the Enlightenment to Clausewitz*, Oxford: Clarendon Press.
- 2001 *A History of Military Thought*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Herbert-Rothe, Andreas
- 2000 "Clausewitz und Hegel. Ein heuristischer Vergleich," *Forschungen zur brandenburgischen und preussischen Geschichte*, 1, pp. 49-84.
- 2001 *Das Rätsel Clausewitz. Politische Theorie des Krieges im Widerstreit*, München: Wilhelm Fink.
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich
- 1970a Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, in: *Werke*, Bd. 8, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (『小論理学』松村一人訳, 上・下巻, 岩波文庫)
- 1970b Grundlinien der Philosophie des Rechts, in: *Werke*, Bd. 7, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (『法の哲学』藤野渉・赤沢正敏訳, 2巻, 中公クラシックス)
- Heuser, Beatrice
- 2002 *Reading Clausewitz*, London: Pimloco.
- Honig, Jan Willem
- 2007 "Clausewitz's *On War*: Problems of Text and Translation," in: *Clausewitz in the Twenty-First Century*, ed. by Hew Strachan and Andreas Herberg-Rothe, Oxford: Oxford Univ. Press, pp. 57-73.
- Jähns, Max
- 1891 *Geschichte der Kriegswissenschaften vornehmlich in Deutschland*, 3 Abt., München/Leipzig: R. Oldenbourg.
- Kant, Immanuel
- 1968 *Werksausgabe*, hrsg. von Wilhelm Weischedel, 12 Bde, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (本文中で Kant, WA として引用。岩波版『カント全集』では、この WA に収められているカントの著述には、『純粹理性批判』を除いて、このヴァイシェーデル版のページ数が欄外に記されているので邦訳箇所をいちいち指示しない。)
- Kessel, Eberhard
- 1987 *Militärsgeschichte und Kriegstheorie in neuerer Zeit*, Berlin: Dunker & Humblot.
- Krug, Wilhelm Traugott
- 1815 *System der Kriegswissenschaften und ihrer Literatur*, Leipzig: Wilhelm Rein.
- Linnebach, Karl (hrsg.)
- 1917 *Karl und Marie von Clausewitz. Ein Lebensbild in Briefen und Tagebuchblättern*, Berlin: Martin Warneck.
- Lossau, Johann Friedrich Constantin von

- 1815 *Der Krieg. Für wahre Krieger*, Leipzig: Wilhelm Engelmann. Marwedel, Ulrich
- 1978 *Carl von Clausewitz. Persönlichkeit und Wirkungsgeschichte seines Werkes bis 1918*, Boppard am Rhein: Harald Bolt.
- Moran, Daniel
- 2011 "Late Clausewitz," in: *Clausewitz: The State and War*, ed. by Andreas Herberg-Rothe, Jan Willem Honig and Daniel Moran, Stuttgart: Franz Steiner, pp. 87-197.
- Palmgren, Anders
- 2011 "Clausewitz's Interweaving of *Krieg* and *Politik*," in: *Clausewitz: The State and War*, ed. by Andreas Herberg-Rothe, Jan Willem Honig and Daniel Moran, Stuttgart: Franz Steiner, pp. 49-69.
- Paret, Peter
- 1985 *Clausewitz and the State*, Princeton: Princeton Univ. Press.
- 1992 *Understanding War. Essays on Clausewitz and the History of Military Power*, Princeton: Princeton Univ. Press.
- 2009 *The Cognitive Challenge of War: Prussia, 1806*, Princeton: Princeton Univ. Press.
- Pommerin, Reiner (ed.)
- 2014 *Clausewitz Goes Global. Carl von Clausewitz in the 21st Century*, Berlin: Carola Hartmann Miles-Verlag.
- Rosinski, Herbert
- 1935 "Die Entwicklung von Clausewitz' Werk "Vom Kriege" im Lichte seiner "Vorreden" und "Nachrichten"," *Historische Zeitschrift*, 151, pp. 278-93.
- Rothfels, Hans
- 1980 [1920] *Carl von Clausewitz. Politik und Krieg*, Bonn: Ferdinand Dümmler. (ハンス・ロートフェルス『クラウゼヴィッツ論』新庄宗雅訳, 鹿島出版会)
- Rühle von Lilienstern, Otto August
- 1814 *Vom Kriege*, Frankfurt am Main: Johann Friedrich Wenner.
- Rüstow, Wilhelm
- 1867 *Die Feldherrnkunst des neunzehnten Jahrhundert*, 2. Aufl., Zürich: Friedrich Schulthess.
- Scharnhorst, Gerhard von
- 1983 *Ausgewählte Schriften*, hrsg. von Ursula von Gersdorff, Osnabrück: Biblio Verlag.
- 2002-14 *Private und dienstliche Schriften*, Köln-Weimar-Wien: Böhlau.
- Schwartz, Karl
- 1878 *Leben des Generals Carl von Clausewitz und der Frau Marie von Clausewitz*, 2 Bde., Berlin: Ferdinand Dümmler. 25
- Smith, Hugh
- 2005 *On Clausewitz: A Study of Military and Political Ideas*, New York: Palgrave Macmillan.
- Stoker, Donald
- 2014 *Clausewitz: His Life and Work*, Oxford; Oxford Univ. Press.
- Strachan, Hew
- 2007 *Clausewitz's On War: A Biography*, New York: Atlantic Monthly Press.

クラウゼヴィッツと政治的交通という概念

Sumida, Jon Tetsuro

2007 "On Defence as the Stronger Form of War," in: *Clausewitz in the Twenty-First Century*, ed. by Hew Strachan and Andreas Herberg-Rothe, Oxford: Oxford Univ. Press, pp. 163-81.

2008 *Decoding Clausewitz: A New Approach to On War*, Lawrence: Univ. Press of Kansas.

Terray, Emmanuel

1999 *Clausewitz*, Paris: Fayard.

Venturini, Georg

1800 *Lehrbuch der Strategie oder eigentlichen Feldherrnwissenschaft*, Bd. 2 (Die Kriegsdialektik), 2. Auf., Schleswig: T. G. Röhß.

White, Charles Edward

1988 *The Enlightend Soldier: Scharnhorst and the Militälische Gesellschaft in Berlin, 1801-1805*, Westort-London: Praeger.